

子どもたちの予想を超える関心を集めて 和楽器に触れられる音楽会は大成功。

公益財団法人日本文化芸術財団は「創造する伝統」というコンセプトの元、子どもたちに日本の伝統芸能を伝える文化祭を毎年開催してきた。さらに2011年度は、誰でも理解できるような工夫を凝らした邦楽公演を開催。どちらのイベントも予想を超える来場者を集め大成功を収めた。

美しい七人囃子が奏でる 和楽器のキャンディーズ。

雑壇になぞらえた舞台に、五人囃子ならぬ七人囃子の演奏が鳴り響く。雑祭り間近の2012年2月19日に開催され



ポップスの楽曲も取り入れ親しみやすいよう工夫された邦楽コンサート



子どもたちは実際に楽器に触り大喜び

た邦楽囃子公演「もうすぐ春」はこうした演出から始まった。笛、小鼓、太鼓、大鼓、笙、二十弦箏、十七弦箏と構成も珍しいが、奏でる曲目も珍しいメドレーになっている。「ひなまつり」、「どこかで春が」、「とおりゃんせ」などの春をテーマにした日本の唱歌にまじって、松任谷由実さんの「春よこい」や、キャンディーズの「春一番」などのポップスが演奏され、締めは「上を向いて歩こう」である。

この催し物は公益財団法人日本文化芸術財団が主催する「創造する伝統」の一環として開催された。同法人の前川千恵子さんは今回の試みについて次のように語る。

「日本の伝統音楽に触れて、親しんでいただくことが目的

ですが、いきなり邦楽ですと敷居が高い面もあります。ですから、より身近に感じていただくために、なじみのある楽曲を取り入れ、楽器に触れてもらうような企画を取り入れました。先生方もたいへん協力的で熱心に工夫をこらしてくださいました」

工夫はさまざまなところに盛り込まれている。コンサートが終わると、ひとつひとつの楽器の面白い解説があった。例えば笙。雅楽でよく使われるこの楽器は、17本の細い竹管が円形に並んでいる。常識で考えるならパイプオルガンのように、竹管が長ければ低い音がでるはずだが、実際は穴の位置で決まるので、管の全長の違いはもっぱらデザイン上のためだという。また、笙はリード部が結露しやすく、音程が狂うため演奏中に頻繁にコンロなどで温めなくてはならないなど、それぞれの楽器についてもその楽器特有のエピソードが紹介された。



毎年人気のあめ細工作り体験



杜の中の文化祭も口コミで広がり多くの親子連れで賑わった

ワークショップで 聴衆の関心をひきつける。

その次のプログラムはこの会を率いた藤舎流六世家元の藤舎呂船さんと、アナウンサーの葛西聖司さんによるトークである。ここでも呂船さんは、小鼓、大鼓、太鼓などの楽器の演奏方法や、素材などについて詳しく紹介した。小鼓の調緒を操作して音色の違いを聞かせ、フライパンを持ち出して叩く位置によって音がどのように変わるか、なども実演してみせた。さらには子どもたちが実際に楽器に触れるワークショップも設けるなど、他の演奏会では体験できない内容が盛り沢山である。

この日の会場となった明治神宮の参集殿は、補助椅子を追加しても立ち見ができるほどの盛況ぶり。その5割以上が初めて邦楽公演に訪れた人たちで、子どもの姿も多かった。

担当者より



今回も子どもたちの
笑顔が見れました。

公益財団法人
日本文化芸術財団
前川千恵子さん

AJOSCの助成を受けて始まった「杜の中の文化祭」は、口コミで広がり数多くのファンを獲得し、子どもたちの年中行事になってきました。また今年度は、新企画の邦楽公演も成功を収めることができました。ひとえにAJOSCのあたたかなご支援の賜と感謝しております。心より御礼申し上げます。

こうして、楽器や古典音楽の基礎知識を学んだあとで、伝統音楽である「狸々」が演奏された。狸々とは中国の揚子江を舞台とする伝説で、水中に棲み、酒を好む猿に似た想像上の動物。能では祝言能として演じられるが、その囃子は「狸々の乱れ」と言われ、狸々は波の上を流れ、また蹴りつつ舞い遊ぶ独特の味わいが有名である。お馴染みの「ホー」「ヨー」といった掛け声のかかる本格的な演目である。

今回の公演を振り返って前川さんは

「邦楽の演奏会ということで来場者が聴念されましたが予想を超える人数で、子どもたちからも『楽器にさわられて、楽しかった』という感想をいただき大成功だったと思っています」と語った。

一方、例年夏休みに同法人が開催していた「杜の中の文化祭」は、今年度は5月15日に開催された。今回の特色は室内ではなく、神宮外苑にある京都造形芸術大学・東北芸術工科大学の外苑キャンパスで行ったことだ。通りすがりの人々も文化祭を知って来場したため、例年以上の大盛況だった。

あめ細工、江戸風鈴の絵付け体験、江戸木版画体験、などのメニューには多くのリピーターがついて、日程が変わったにもかかわらず多くの親子連れで賑わった。次年度以降も文化祭については続けていく考えである。